

「予備校文化」の終焉と再生——茅嶋洋一さんの追悼にかえて

加藤万里

戦後三大教育裁判の一つである「伝習館裁判」を闘った茅嶋洋一さんが、昨年秋に亡くなった。七十七歳だった。彼は、まだ裁判闘争の渦中であつた四十年近く前、乞われて河合塾福岡校の講師になり、その後いわば河合塾の「予備校文化」というものを強力に体現する一人となった。本小論は、その茅嶋洋一という強烈な個性を持つ人物へのささやかな追悼と、彼を通して考えた「予備校文化」についての、予備校の傍流の位置から眺めた試論である。

河合塾福岡校という場所

茅嶋洋一さんは、二〇一六年に亡くなった同僚の河合塾講師・牧野剛への追悼文の末尾で以下のように語った。三年半前のことである。

「先に現世を去り、彼岸へと旅立った牧野よ。お前は病を患って以来、この間酒を断ち、語る場も狭められていた。だが、彼岸の里ではもはやその必要もなかろう。心ゆくまで飲み、かつ語れ。そのうちに俺もそちらへ行くことになろう。その時には、彼岸の池塘春草に座して、睡蓮の開花を恋いつつ、酒杯と言の葉を交わそうではないか。再見。」(茅嶋洋一「牧野追懐記」、『原点としての恵那の子ども時代』あるむ、二〇一六年)

この呼びかけには、自分はまだまだしばらくはこちらの世界にいるだろうとの彼なりの予測が込められていたはずである。読む者も安んじてそう読んだ。だが、その茅嶋さんまでもが、昨年(二〇一九年)十月二十六日に急に逝ってしまった。

こうして身近な人が一人ずつこの世界から去っていくたびに、改めて、私たちは奇妙な偶然によってこの世界に生まれ出て、ほんのつかの間この世界に滞在しているに過ぎない、ということに気づかされる。命というもののこの根拠の無さはめまいを覚えるほどだが、それにしても茅嶋さんはこの世界に深く爪を食い込ませていた。その印象が強い分だけ、その死は受け入れがたく、いきなり足を払われたような気分である。

茅嶋さんは、福岡県立伝習館高校の教師を、後述するように一九七〇年に「懲戒免職処分」となった後、二十代後半という若さではやばやと人生の浪人を決めこんでいた。「処分取り消し」の裁判を闘いながらの人生の浪人である。その彼を、すでに河合塾にいた牧野

が福岡にやってきて、「人生の浪人こそ、受験の浪人を教えるべき」だと、わかったようなわからないような口説き文句で半ば強引に河合塾に誘ったという。それが、茅嶋さんが河合塾に来ることになったそもそもの発端である。「処分」からほぼ十年たった頃、その春から河合塾福岡校が開校するという一九八一年の元旦のことである。

おそらく当時の河合塾には、こうした誘いについて乗ってみようかと人に思わせてしまうような、ある種のエネルギーと冒険の気配が充満していたのだろうと思う。その後、茅嶋さんは、「自分がかかわる以上この場を面白い空間にしたいとの想いと、「俺が河合塾である」という自己意識から、全身的に予備校講師とならざるを得なくなった」(同)ということで、できたばかりでまだ方向も定まらない河合塾福岡校の中身を「全身」で創り上げていく。こうして河合塾福岡校は、河合塾の重要な文化拠点の一つ、それも東京や名古屋、大阪の河合塾とは一味違う独特な文化拠点となっていった。

その頃の河合塾には、控えめに言っても反体制的エートスのようなものがその底流に流れており、それが河合塾の「予備校文化」というものを形作っていた。本来、知性というものが同時に批判精神をはぐくむものである以上、さまざまな矛盾を生み出す国家や支配権力についてそれを批判するのはむしろ当然なことである。ただ、どちらの方角から来た体制批判であるか、ということにおいて、河合塾福岡校にはある独自性があった。つまり、他の河合塾と違って、ここには西欧近代を範型としたリベラルな進歩派の方からの体制批判というよりも、遠く明治維新にまで遡ってこの国の近代のありよう、西欧近代をそのまま接ぎ木したようなこの日本近代のありようを批判する、そうした独自の体制批判があったのである。これには、やはり茅嶋さんの存在が大きく影響していたと思う。

筋金入りの反近代主義者

茅嶋さんは、筋金入りの反近代主義者である。ひとまずそう言ってもそんなに間違いではないだろう。少なくとも私にはそう映った。その意味で言えば、彼には、「社稷」を重んじる榎藤成卿などに傾く一面もなくはなかったが、しかし前近代に帰ればいい、土や自然に帰ればいいというような後ろ向きのロマン主義者ではなかった。彼は反近代を胸底に秘めながらも、一方で近代的な思想と思考方法を内面化し、論理の整合性や明晰さに徹底的にこだわる合理主義者でもあった。もちろんこれがなければ、現行法の枠に則って「処分」に対する裁判を起すこともできなければ、ましてや予備校で現代文、小論文の講師などがとまるはずもなかっただろう。その意味で「近代」は彼の身体をも貫通していた。だがそればかりでなく、いわばポストモダンの近代国民国家（批判）論をも彼は手繰り寄せて、自らの近代批判に同期させていた。

そしてこのように、反近代・近代・ポスト近代の思想を渉り歩きながら、その知と感性の一切をもって、彼は、この近代日本一五〇年のありよう、つまり拙速な資本主義の取り込みと欧米に並ぶ帝国主義化への邁進という「明治専制政府によるこの近代国家の建設」

のありように異議を發し続けた。つまり、彼は常に自覺的な反近代主義者へと立ち戻っていったのである。

茅嶋さんは、たとえばいまこうして授業で立っている自分の位置を、<日本国、福岡県、福岡市、中央区、渡辺通>ではなく、<東アジア、九州島、博多の辻>と称することがあった。そこには、近代国家の国境線を超えてもっと広い空間に自らを解放し、そこでまだ見ぬ他者と連帯するべきだという、ある種のアジア主義への彼の思いがある。

アジア主義といえば、あの玄洋社の頭山満などがすぐさま連想される。頭山満とは、一般にはこの国の国家主義の草分け的存在、右翼の巨頭と目されるが、その彼は、西郷隆盛を敬慕し、中江兆民や福沢諭吉と親しく、広州蜂起や甲申政變の獨立運動に失敗して中国大陸や朝鮮半島から逃げ込んできた孫文や金玉均を助ける義侠心のある、一概には右翼とも左翼とも決められない大きな人物である。奇しくもこの頭山満は、茅嶋さんの母方の大伯父だかにあたる親戚であり、彼は幼少時からよく彼の話を聞いていたという。それもあって彼自身、少年時代からこうした人物たちの文献を広く渉獵した。そのことによって、国家を越えた広い視野とこの国の近代を批判的に相対化する独自のまなざしを獲得したといえよう。

茅嶋さんが「先の戦争」というときには、それは太平洋戦争ではなく西郷隆盛の「明治十年戦争」のことになる。おそらく彼には、この明治十年戦争（「西南の役」）こそがこの国の近代化の分かれ道となり、そこで日本は大きく道を誤ってしまったのだという痛切な思いがある。この、現実の近代ではなく、ついに実現しなかったオルタナティブな近代への思いが、生涯彼の思想の深部に根を張っており、それが彼を筋金入りの反近代主義者にしていたのである。

茅嶋さんは、学生時代に早稲田大学雄弁会の会長をつとめたが、この雄弁会とは森喜朗、海部俊樹、小渕恵三などの首相経験者を含む自民党の大物政治家を数多く輩出してきたところとして有名である。そのために、茅嶋さんがこの雄弁会の会長になる時には、「伝統ある雄弁会を左翼にのっとられるな」という自民党のかけ声のもと、その妨害工作のために百万円単位の資金が自民党から雄弁会に流れた、という伝説もある。二十歳前半の学生に対しての自民党の破格の待遇＝警戒ではある。

自民党には左翼と認識されたいのだが、その風貌からしても思想からしても、彼自身は頭山満と同じく、にわかには右翼とも左翼とも判別つかないところがあった。肩近くまである長めの髪、鋭い眼光を放つかつい顔、どすの利いたよく通る声。名古屋へも常に和服か作務衣姿で登場するという具合で、その風貌には、昔の大陸浪人とはかくなるものかと想像させるようなところがあった。

あるとき新右翼の一水会の鈴木邦男が、九州一円の右翼を集めて大きな会を持ったことがあったという。なぜかそこにいつもの和服姿で乗り込んだ茅嶋さんが、居並ぶ人々に向かって「右翼が洋服を着てくるとは何事か！」と一喝し、その場を騒然とさせたという逸

話もある。こうした逸話や伝説には事欠かない人であった。

茅嶋さんは昨年（二〇一九年）の春ごろから体調不良を覚えるようになり、ようやく夏に病院で正式な検査を受けたのだが、その時にはすでにさまざまながんが進行していることが判明し、全身がんと宣告をうけることになった。

「まあ、これだけ長いあいだ酒もタバコも好きなようにやってきたんだから、どんな結果が出てもやむを得ないだろうとは思っているんだけどね」と、検査結果が出る前の電話で淡々と語っていた彼は、実際の結果が出てからも一ミリも慌てたようにはみえなかった。そして、がん治療をしなければ年が越せるかどうかわからないとの医者の見立てを聞くや、迷うことなく一切のがん治療を放棄した。治る見込みがない以上、手術や抗がん剤、放射線治療などに自分の存在と時間が従属させられるようなことがあってはならない、との彼らしい判断があったのだと思う。彼にとってはいかに自分が自律的・主体的に生きられるかということが、何をおいても重要だったのである。

がんの検査結果が出たほぼ一か月後の夏の終わりに、木々の緑濃い福岡市香椎の茅嶋さん宅に、京都の青木和子さんと見舞いに行ったが、そこにはいつもと変わらぬ茅嶋さんが、節子夫人とともに泰然と構えていた。この時、がんの治療放棄という決意が逆に彼の免疫力を増したのではないか、とこちらがいぶかるほど縦横無尽に話を展開する茅嶋さんを見てひそかに驚いたが、同時に、非日常である死がすでに彼の日常生活に降りていて、彼の腹を括らせているんだなということも実感した。とはいえ、「この分なら年を越せるどころか、来年（二〇二〇年）六月の伝習館処分五十周年までも生きられそうだね」などと実に希望観測的な会話を二人でしながら帰途についたものである。客観的な事実とは別に、実は茅嶋さんが亡くなることなどありえないと心のどこかで思っていたのかもしれない。それからわずか一か月後の十月下旬、不意を突くような死であった。

伝習館裁判と近代公教育批判

茅嶋さんは、全国で大学闘争が吹き荒れていった一九六〇年代末ごろには、すでに大学を卒業して福岡県立伝習館高校の教師になっていた。伝習館高校とは、江戸時代の柳川藩の藩校の流れをくむ地方の名門校である。彼は、当時の騒然とした時代の雰囲気の中で、自分の教師としての役割を当初から意識的・自覚的に考えていたのだが、そもそも明治以来の近代国家を批判的に捉える彼にとって、その近代国家を支えるための公教育制度は当然批判の対象になってくる。むしろそれだからこそ、彼は、この公教育制度の中で、自分が考える自由な教育、つまり従順な人間ではなく自律的な判断を下せる主体的な人間を作る教育とはどのようなものかと考えたのに違いない。その意味では、この教師職に期するものがあつたともいえよう。

「もともと、自分が受けた教育体験を通じて感じ取ってきた、「学校」という制度的・権力的な場のいかがわしさ、「教師」なる者のもつ特有の事大主義や権威主義といったものに対する違和感が私の心のうちに先行しており、そのような「学校」「教師」の属性ともいべきものから自由でありたいし、あらねばならぬ、というのが初発の自戒であった。」

「「学校」とは、国家に浸透されつくした空間であり、「教師」とは、国家からその権力を分有させられた存在である。その公権力を末端において、「教師—生徒」の関係の中で振るうことこそ、「教師」の任務に他ならない。」

「近代公教育は、生活から切り離された時・空を持つ学校へ、「生徒」という「教えられることを専らにする存在」として子供を隔離・収容し、発達にそくして（と仮定された）組織・編成された知＝教育知＝学校知を「学ぶべきもの」として強制する装置を前提にしている。従ってこの「知」は、人間の全体性に相渉らず、想像力の解放とは逆のベクトルを持つ」

「公教育における「教師と生徒との関係」は、生徒においては、生徒が教師を通して生徒自らを支配し・差別し・抑圧する関係としてあり、教師においては、教師が生徒を通して教師自らを支配し・差別し・抑圧する関係として存在する。この関係の構造を媒介するものが、教科書・評価・管理なのである。」

（茅嶋洋一「学校幻想の共犯関係を越えて」『河合おんぼろす』河合文化教育研究所、一九九二年）

ここでは、学校つまり公教育とは結局何であるかが、根源的なところから突き出されている。「国家に浸透されつくした」空間としての学校と、その国家の意向を請け負う教師とそれに従う生徒という教師—生徒の権力関係、そしてその権力関係を媒介するものとしての「教科書・評価・管理」。本来の教育とは、この対極にあるものだという、つまり権力関係に人間を押し込めるものではなくそこから人間を解放するものだ、という彼の想いがここに込められている。

高校教師としての茅嶋さんは、生徒たちに既存の権力秩序や常識を自明視せずに自分で主体的に考え判断することを求め、そのためにそれに合った教材を準備し、教師の生徒支配の源である評価権を捨てて一律評価とし、生徒を支配・管理するのではなく生徒と人間的に向き合うような授業を展開していった。これが伝習館高校の卒業式事件など種々の問題を経て、偏向授業だとみなされることになったのである。

こうして、一九七〇年六月には、わずか四年あまりでその伝習館の教師職を「懲戒免職処分」によって（他の二名の教師を道連れにして）解かれることになる。この時の茅嶋さんの処分の理由としては、「検定教科書不使用、文部省の学習指導要領無視、一律評価、反体制思想の鼓吹」などが挙げられている。あの一九六〇年代後半の、大学闘争が燎原の火のように全国に広がっていく騒然とした時代の中では、この程度の公教育からの逸脱はおそらく日本中でいくつもあったのではないかと思われるのだが、懲戒免職処分にまで至っ

たのは、やはり茅嶋さんという特異な個性が危険視されたのではないかと思う。この処分
の取り消しを求めて起こされた訴訟が、家永三郎の「家永教科書裁判」、保坂展人の「麹町
中学内申書裁判」と並ぶ戦後三大教育裁判の一つとなった「伝習館裁判」である。

この裁判では、文部省の学習指導要領の法的拘束力が主に争われたということだが、結
局問題は、教育権というものが国家にあるのか、国民にあるのかということになる。戦
前の教育権は紛れもなく国家にあったが、「教育基本法」をもつ戦後民主主義の中では建前
上は国民にあるはずだった。したがって、この処分に対しては、「教育の自由を著しく損ね
る不当なものであり、教育の自由は、子供や教室の実情に合わせて、教師が（本来助言、
示唆にとどまるべき）学習指導要領を実践的・批判的に生かすことで、実現の緒につく」
（日本文学協会）といったまっとうな反論がいくつも出された。実際この処分の取り消し
を求める支援運動は、伝習館高校の在校生や父兄だけにとどまらず全国に広がっていった。
ちなみに一九七八年の福岡地裁の判決は、文部省の学習指導要領の法的拘束力に限界があ
ることを示して、教師に一定の自由裁量権を認め、茅嶋さんを除く二名の教師については
処分取り消しの決定を下している。一九九〇年の最高裁は、再びそれをひっくり返して、
教育への国の介入を大幅に認めたのである。

だが、茅嶋さん自身は、実はそうした現行法の枠内、現行の教育システム内の闘いだけ
をめざしていたのではなかった。戦後民主主義の中で国民にあるとされていた教育権が、
再び国家によって侵食され始めている、という一般的な危機感に対して、茅嶋さんの認識
は、前述したようにその先にあったからである。つまり、彼はその「国民」そのものを原
理的に問い直したのである。

伝習館処分から四十周年になる二〇一〇年六月に、処分四十周年を記念して、茅嶋さん
の特別公開講座「〈言語・国家・歴史〉そして〈教育〉」が河合塾福岡校で開催された。当
日は、一般の参加者も含めて福岡校の大教室が立錫の余地ないほど埋まったが、その講座
の案内文で彼は、「近代公教育制度」について次のように語っている。

「席卷するグローバリズムの嵐の中、一方でナショナリズムの新たなる台頭とその
角逐が世を覆う感が強い。ただそこに表出している経済・政治的利害の争いの裏で暗
黙の前提とされているのが近代国民国家の物語りとして織りなされた「国民の歴史」
であり、それに呪縛された幻想の共同性であろう。

この度非公開とされた日・中初の「歴史共同研究」報告書をめぐると、対立・食違い、
昨今の「日本史教科書問題」論争、さらには韓（朝）・中間の「古代史領域」論議——
これらの問題の核として根底に横たはり、我々の意識を掣肘しているのが上記の「国
民国家の物語」と、その共同幻想を織りなす系として紡ぎだされた「言葉＝国家」と
いう近代の制度的観念ではなからうか。

そしてそこに見て取れる言語・文化の通時的・共時的同一性信仰をこの間絶えず再

生産し続けてきた装置こそ、近代公教育制度であるといえよう。これら〈言語・国家・歴史、そして教育〉にかかわる諸制度・観念の構造的連関を対象化し、その自明性＝絶対性意識から自らを解放する作業が今日求められているのではないのか。」

(二〇一〇年度日本近代思想史研究会(河合文化教育研究所)特別公開講座「〈言語・国家・歴史〉そして〈教育〉」チラシより抜粋)

ここでは、「近代公教育制度」をめぐって、「国家に教育権があるのか、国民に教育権があるのか」というナイーブな問いの地平は越えられ、そもそも「国民」とは何かを問い直し、国民とはニュートラルな存在ではなく「近代国民国家」を維持するための「幻想の共同性」を帯びた排他的な存在だと喝破されている。近代国民国家とは、その成立時もそれ以後も「言語・文化の通時・共時的同一性信仰を」「絶えず再生産し続け」なければなりゆかないものであり、まさに近代公教育制度とはその再生産を担う装置として明治維新以降のこの日本という近代国民国家の基となる「国民」を創りあげたのだ、というのが茅嶋さんの主張である。むろんこの同一性信仰からはみ出すものは排除される。というより、むしろ排除・差別されるべき異質な他者があらかじめ決定され、それを排除することによってこの同一性信仰、幻想の共同体が生産されるというべきであろう。

したがって、茅嶋さんが教師として試みようとしたことは、公教育の中にいながらにして確信犯的、実践的にそれを内部から食い破る、つまり近代公教育のパラダイムそのものをつき崩そうとした、ということになる。そうだとするなら、彼のその動きの延長線上には、この日本という近代国家の否定が不可避に露出してこよう。国家が茅嶋さんに危機感を持ち処分に走ったのにも、日教組が彼の裁判闘争を支援しなかったのにも、そう考えればそれなりの理由があったことになる。

では、果たして伝習館高校でやろうとしながら処分によって中断された彼の自由な教育の営みは、河合塾に来ることによってそれなりに実現できたのだろうか――。

その前に、まず一九七〇年代以降に大きく脱皮した予備校、すなわち「予備校文化」という言葉に象徴される予備校とは何かについて、いったん茅嶋さんを離れて、ここで見ておきたい。

「予備校文化」とは何か

「予備校文化」なる言葉がこの国でさかんに語られていたのは、およそ一九七〇年代から一九九〇年代くらいまでのことだと思う。この言葉には戦後の公教育に対する逆転の発想がこめられていた。つまり、公教育＝中心、予備校＝周縁という構図を前提にした上で、周縁の存在である予備校だからこそ、逆に何にも縛られない柔軟で自由な教育ができ、そのことによって中心つまり硬直した学校教育というものを鋭く撃つことができるのだ、という含意がそこにはあった。

予備校の講師一人ひとりの個性と信念に根差した授業、講師と生徒のあいだの生き生きした往還関係、そこから生み出される生徒と講師自身の自己変革。予備校とはそういう創造的な営みのあるところであり、したがって予備校では制度に縛られた画一的な教育ではなく、自由な教育ができる——。それまで、受験のテクニックを教えるだけの受験産業とされていた予備校が、実は物事の本質に届くような授業をしており、逆に高校が受験テクニックしか教える余裕のない場になっている、というような転倒が「予備校文化」という言葉とともにさかんに語られた。

それは、予備校にいる人間だけではなく、時代に対して鋭い感性を持っている一部の識者にも持たれていた認識だった。のちの東大総長でその当時は映画評論のかたわら東大に表象文化論のコースを立ち上げようとしていた蓮實重彦も、河合塾千種校での講演で、当時著名な作家から河合塾につけられていたあるクレーム事件を講演の枕にしなが、次のように「予備校文化」について語っていた。

「今、河合塾としてはあまり口にしたくない作家が一人いるわけです。(爆笑) (拍手) (注) その人と僕とは、決して敵対関係にあるわけではありませんけれど、僕はその人を軽蔑しているわけです。(笑) (拍手)」

「たとえばあの方が日本のさまざまな雑誌社・新聞社・出版社というもののなかである程度重視されているわけですが、いまそうしたものが作り上げている日本の文化の貧弱さと、河合塾のような予備校が、日本の中で作り上げている文化の不気味なアナーキズムと、どちらが重要か？僕は、やはり予備校のように、既成の秩序に登録されていないものが作り上げている文化のほうが、面白いし活力にとんでいるという気がしています。」

「皆さん方は、好きで予備校に来ているわけではない、とおっしゃるかもしれませんが、社会的役割以上のある種の積極的文化というのを、どうも予備校が担ってしまっているのではないか。」

「おそらく、いまだ十分に分析されつくしていない「予備校文化」というものが、二一世紀、二二世紀の人々にとって、一九七〇年代八〇年代の日本を分析する場合に、どうしても考えておかなければならない、あるいは何かの形で機械にインプットしておかないと、その時代の文化の相貌が把握しがたくなる要素の一つとして出てきているように思うのです。」(蓮實重彦『映画からの解放』河合ブックレット、一九八八年、河合文化教育研究所)

(注) 当時河合塾の現代文の模擬試験に丸谷才一の記事が出題され、その解答の解説でその当の丸谷の文章が批判的に解説されるということがあった。それを知った丸谷才一本人が、怒りとともに、それを予備校の恣意的偏向的指導、ファシズムだとクレームをつけたのはある意味必然の成り行きであった。その彼の言い分に沿って朝日新聞など多くのメディアが、「丸谷才一对河合塾」すなわち「権威ある作家対いかがわしい予備校」という対立図式の中で、河合塾を袋叩きにする

いう事件があった。蛇足ながら、この丸谷オーのクレームに対して、当時の河合塾現代文の責任者であった山田伸吾が、ある月刊誌にきちんとした反論を書いたのだが、どのような付度があったのか、なぜか直前になってその掲載が取りやめになるという事態が起きている。

いまとなつては、この八〇年代後半の蓮實重彦の言葉は予備校に対する過剰な評価・思い入れだったと言ってしまうこともできる。しかし、あの頃、彼に「文化の不気味なアナキーズム」と言わしめたようなある無定形な熱量が予備校から発散されていたのは確かだったのである。

河合塾では、この蓮實重彦のような講演会が、全国各地で一年に延べ一〇〇回近く実施されていた。また河合文化教育研究所でも「日独文学者の出会い」「日・中・韓の大学入試統一試験を社会的、文化的に比較分析する衛星シンポ」などさまざまな国際シンポジウムが開催されていた。それは、受験勉強に直接関係ないこうした試みこそが、逆に受験生が潜在的に持つ豊かな可能性を汲み上げるものであり、それを彼らが自力で汲み上げるように手助けすることこそが教育であり、それが彼らの地力をつけ、ひいては受験に対する実力をもつける、と考えられていたからである。

河合塾では、今でも各地区でさまざまな識者、文化人を招いて文化講演会が行われており、受験生に物事を深く考える刺激やきっかけを与え続けている。また河合文化教育研究所には、講師によって営まれる二十以上の研究会が今も活動している。とはいえ、予備校全体としては、以前のような不気味でアナキーなエネルギーというものはもはや感じられなくなり、もっと何か整ってきた印象がある。皮肉なことに「予備校文化」というものが一定程度社会に受け入れられ、予備校自体がマイナーな存在からメジャーな存在へと、つまり周縁から中心へと社会内を移動していくにつれて、逆に周縁にいたからこそ持つことのできた自由で猥雑なエネルギーが殺がれていってしまったのである。

この事態に強い危機感をもって、河合塾の「予備校文化」を守ろう、あるいはそれを再生させようとさまざまな形で努力している講師はいまでも決して少なくない。そこでは「教育とは何か」という問題が常に問われ考え続けられている。茅嶋さんはその中心的な一人だった。

「予備校文化」とは、さらに遡ると、実は一九六〇年代末のこの国の大学闘争、つまり東大闘争・日大闘争から始まってついには各地の大学にまで吹き荒れていった大学闘争から生まれたものだ、ということもできる。社会の矛盾だけでなく、大学というものの特権性をも自らの足元から問い直し、さらには近代的な学問自体をも鋭く批判していったこの六〇年代末の大学闘争は、ある根源性(=ラディカリズム)を孕んでいたために、むしろ現実的には敗北するほかなかったともいえるのだが、その闘争の場、問い直しの場が、意匠を変え、あるタイムラグとともに予備校に持ち込まれた、ということもできるのだ。

六〇年代末の大学闘争が終結していった後の七〇年代、本来大学に残って研究者になる

はずだった実力も問題意識もある優秀な院生、研究者が、この闘争のために大学でのポストをあきらめ、あるいは自ら大学を見限り、大挙して予備校に流れ込んでいくことになった。講師としての優秀な人材の確保は予備校の生命線である。予備校側もこれを積極的に受け入れていくことになる。そしてこの事態が予備校を内側から大きく変容させ、単なる大学入試の受験準備機関から、「予備校文化」という言葉が生まれるほどに新しい地平を切り拓く存在へと脱皮させたのである。

この種の予備校講師として象徴的なのが、駿台予備学校の理系の講師として名を馳せたかつての東大全学共闘会議代表の山本義隆と東大助手共闘会議の最首悟である。彼らのその後の仕事ぶりや著作——たとえば山本義隆『磁力と重力の発見』（みすず書房、二〇〇三年）、最首悟『星子が居る』（世織書房、一九九八年）など——を見れば、一般の大学教師をはるかに超える学問の質と思想性を持っていることは明らかであるが、彼らに限らず、戦後社会の矛盾も大学の特権性もすべてを根底から見直そうとする問題意識をもった若い研究者の良質な部分が、この時期予備校に流れこんでいった。また、代々木ゼミナールには、そうした動きに先駆けて「ベトナムに平和を！市民連合」（通称「ベ平連」）の小田実や吉川勇一がすでに六〇年代中葉から教えていた。遅れて、反天皇制運動を創ってきた劇作家で評論家の菅孝行やこの伝習館裁判の原告である茅嶋さんなどが河合塾に集まった。こうして予備校とは、社会的秩序におさまりきらないゆえに、逆に鋭い社会性を持つ知の最先端のつぼといってもいいものになっていったのである。

特に一九七九年の「大学共通一次試験」実施以降、駿台予備学校・河合塾・代々木ゼミナールのいわば三大予備校に良くも悪くも予備校は収斂していくことになるのだが、そこが「予備校文化」の発酵の場ともなっていた。一九八六年には『ザ・予備校』（第三書館）という本も出され、個人情報保護が謳われるいまではほとんど信じられないことだが、そこには当時の三大予備校の有名講師がほぼ全員経歴と顔写真入りで収録されていた。彼らの顔やその紹介記事を通して「予備校文化」というものが、ある実体を持つものとして可視化されていったのである。

「予備校文化」は終焉したのか

「予備校文化」とは、二〇二〇年の現在から考えれば、仇花のようなものに過ぎなかった、と断じることできる。だが、それは後知恵というものであり、そういうだけでは済まないもの、済ませるわけにはいかないものを確かにもっていた。それは、場合によっては社会や教育を別様に切り拓いていく可能性をも孕んでいたのである。また茅嶋さんの意図したように、近代国民国家の自明性に深く亀裂を入れることもできたのかもしれないのだ。ただ、この三十年間を振り返ると、時代の方が先にドラスティックな変化を遂げてしまった感が否めない。

「予備校文化」がなおもさかんに語り続けられていた最中の一九九〇年前後、すでに世

界は冷戦終結を経て大きく変わり始めており、いわゆる英・米中心の新自由主義的市場経済、いわばグローバリゼーションというものが世界中を席卷し始めていた。その進行過程で、またたく間に世界中に深刻な社会格差が広がっていくことになるのだが、その動きの中で「自己責任」を合言葉に民主主義も公共空間も切り縮められ、ローカルには「予備校文化」の持つ可能性の芽も奪われていったのである。

この国ではこの二十年余、この新たな新自由主義市場経済に適合するような人間を作るための「教育改革」が産業界の要請をもとに着々と進められ、健全な批判精神を持つ自立した人間よりも計算のできる市場適合的な人間形成が教育でも臆面もなく目指されて、一定の成功を収めている。予備校でも、この国家の教育の方針に合わせるようにそこに来る生徒自身（と父兄）がまず変容し、予備校講師もそれに危機感を覚える講師だけでなく、むしろそれに同調する若い講師が増えていった。「予備校文化」の持つ可能性の芽が奪われていくとは、予備校というものを構成する生徒と講師の母集団のこの変化による、内部からの漸次的崩壊のことでもある。この変化が、人間の可能性を掘り出し原理的な問いかけを促そうとする、有志の予備校講師の個々の努力を大幅に上回り始めたのである。

この「教育改革」の帰結の一端が、大学の基礎研究をほぼすべて薙ぎ払っていった小泉政権時の「国立大学独立法人化」や、あまりの中身の粗雑さのために現在頓挫しているこの間の「大学入試改革」である。

近代公教育の対極にあると目され、「予備校文化」と持ち上げられてきた予備校は、このあとどうなっていくのか。なおそこに可能性はあるのだろうか。

かつて茅嶋さんは、伝習館高校という公教育の真ただ中で、その公教育を内部から食い破ろうとして「懲戒免職処分」を受けた。その後は裁判闘争を続けながら、自分の自由な教育の試みを河合塾に移して若者たちに全力で向き合い、予備校文化を体現する一人となった。

だが、いまではその予備校自体が内側から変容してきているのだ。

もともと予備校とは、どこまでいってもこの現在の資本主義の産業構造の中に組み込まれた教育産業という存在に過ぎない。以前には公に認知されない分だけまだしもすき間産業ゆえの自由さがあったが、今では教育産業であると同時にスマートな情報産業でもある。講師陣も問題意識と社会的屈折を持つ層から、普通に収入がよい職業として就職してくる層が増えた。しかし、そうした事実をすべて押さえたうえで、にもかかわらずそこからなおどんな可能性を引き出すことができるか、という課題は残る。この課題はいまも、そしてこれからも、むしろ社会の矛盾が深まっている現在、さらに重要な課題としてどこまでも残るだろう。

「予備校である河合塾は「教育産業」である。講師の授業や職員・スタッフが作成する入試情報、学力測定のための模擬テストなどを商品として提供し、消費者である生徒（親たち）がその商品进行评估するという市場原理が持ち込まれた業界である。」

「授業が商品となるのは予備校の宿命である。しかし、このことを自覚した上で、「教育」に携わる者として「教える」ということがもつ本来の意味を考え、授業や予備校空間でどのように実践していくかを模索している講師・職員集団もいる。

こうした予備校が本来もつ市場原理・自由競争を相対化し、新しい枠組みで教育を考えていこうとする人間主義・文化主義が河合塾の文化路線で、河合塾の伝統となつて久しい。」(青木和子「グローバリゼーションと教育」、斉藤日出治『グローバル資本主義の破局にどう立ち向かうか』河合ブックレット、二〇一八年、河合文化教育研究所)

予備校とは資本主義の中の教育産業に過ぎない、という客観的事実を冷徹に押さえた上で、それでもその地平を越えて何ができるか、どんな教育の可能性を新たに開くことができるか、ということを探索するのが、河合塾の「人間主義・文化主義」すなわち「予備校文化」である、ということをも二〇一八年というほぼ現在の段階でもいまなお粘り強く訴えているのが、青木和子である。ここでいう「人間主義」の「人間」とは、以下の茅嶋さんの人間像にも重なるものであろう。

「本来人間とは、自己と世界に対して悩み、苦しむ存在であり、それを通して人としての器を形成し、また力量をつけるものである。まして青春期とは、さまざまな異質な他者や事物や風景と出会い、交流葛藤して、己を開き、自己の世界を築くべく、その基としての思考力・判断力・表現力を養う大切な時期である。」(茅嶋洋一「大学入学共通テスト(仮称)「国語記述式問題モデル問題例」批判」二〇一七年、河合文化教育研究所ホームページ)

グローバル市場での競争に勝ち抜く有能なプレイヤーか、あるいはその市場を下から支える従順な人間か、そのいずれかの形成だけが目指されるような、人間不在のこの間の教育改革を批判して、悩み苦しむ生身の「人間」が他者と出会うことによって成長することの大切さを、そしてそれを促すものこそが教育であるということをも、茅嶋さんはここで改めて訴えている。

国民国家という共同幻想を支える排他的な「国民」と、一方で資本主義の産業構造の中の市場原理・自由競争に勝ち抜こうとする市場適合的な人間と、そのどちらをも批判的に相対化し、この内なる二つの挟撃の中であらためて「人間」というこの手あかのついた言葉と存在を洗い直して、生徒を人間として信じて彼らに向き合う。これが茅嶋さんをはじめとする河合塾の心ある講師の姿勢である。

茅嶋さんは亡くなったが、彼に続くこうした心ある講師の存在がある限り、「予備校文化」は表層の逆風をこえて脈脈と生き続けるのではないかと。地球環境も人間内部の自然も荒廃が深化していく今こそ、「予備校文化」に象徴されるようなものがますます強く求められているのではないかと思う。

(『象』二〇二〇年春九六号)